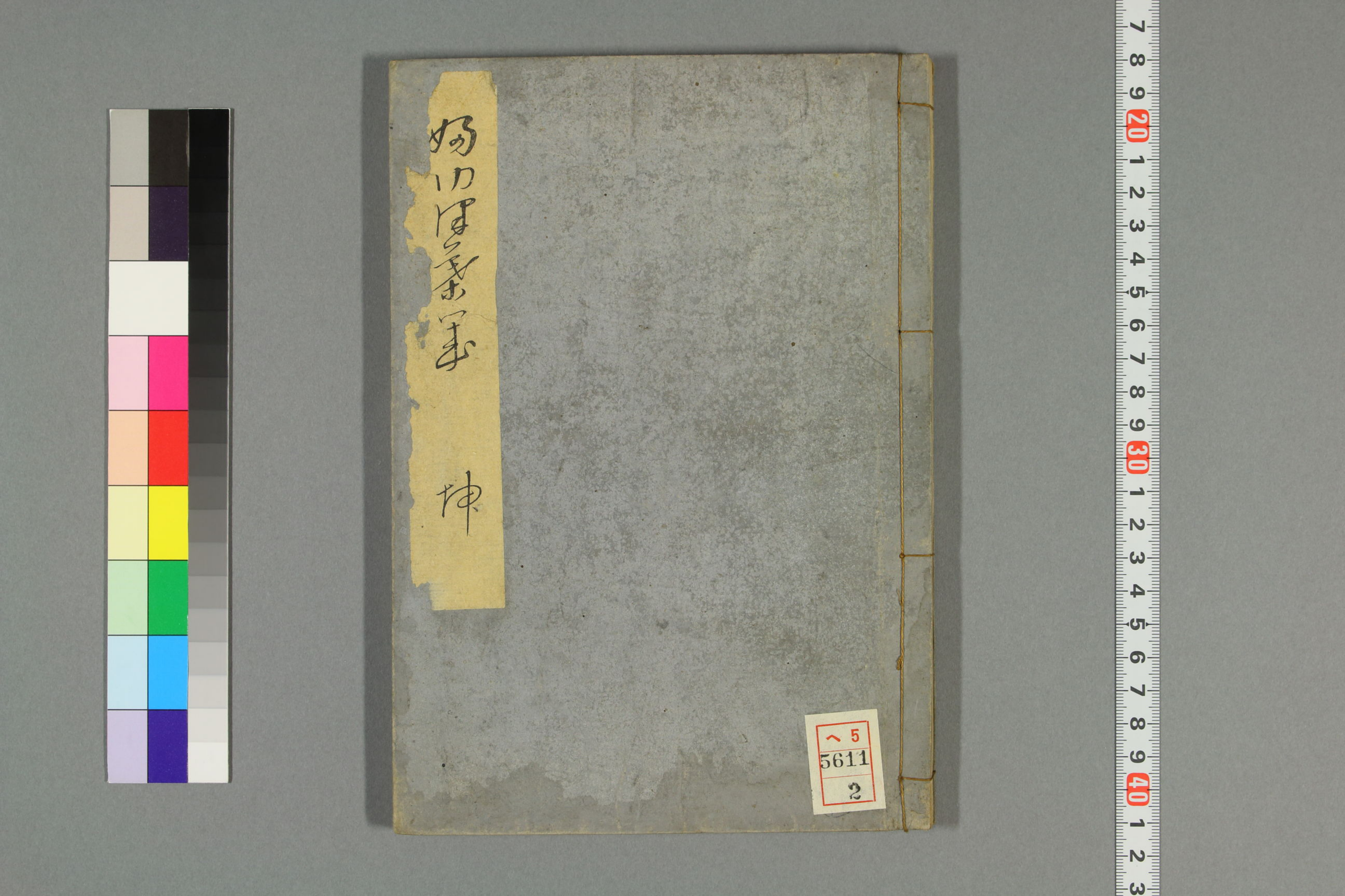
姫川温泉誌
坤
へ 5
5611
2

門 ヘ5
號 5611
巻 2

早稲田大学図書

春樵集下卷

春之部

初春や水ぬるむと魚氷解　如草

中宵や消ぬ時雨の音　光右

去年や老ぬ犬の物初　氷壺

伝傳千家鴨乃加せく時雨の音　鹿山

新しき紙鳶ぬ夕去る紙　流芝

風の止て行くしら山の宮　釈桃隅

汐さゝぬ川は埋む蓮葉哉　山分

未発の居さまの淋しき秋　一具

埋火や手あぶる膝の人目　助宮

のぼる日よ光りやうやく炭みかゝる　季碩

北東北山の時雨の横ぶるう　杏入

雲暖よ為のくもりやタ方雨　正甫

黄昏を求るむ田面哉　暮林

ふの雲をもゆるやうに秋　三和

首なしを人とおうやう雪の言　巴山

遠方や明るまよる山と祇　竹深

森をあをハおれ一筋の布哉　雀庵

炭俵をもすまうふやうの遠方　雲分

一海に来ても鯨おさまる哉　学村

傳奇の樹も岩きん和時雨　奥清水

色ゆるよ猶き紅葉やまん霜　コヤコ　ひ良

山ちゝ紅葉ゆ初しくも、　桂舟

時雨行かゝ人もも立ぬうか、　ひさめ

古寺ゆ和もの時雨の降れ　テハ　雲涯

縫の蔦　脊中ひく白髪角　キクセン　芦雪

ゆ紙うゝ見ゆ一ゆ　ヒコ　仙翁

楊先や白髪の白れ以ゆ　サカミ　可頂

八華坊の仕也ゆ夢ゆ梅ゆ　十二月　其山

面の春ゆ少梅ゆ　ユチコ　月昇

木かゝしゆ社ゆ一ゆ所　イセ　梅職

風ゆ山ゆ色ゆ雪ゆ　ムサシ　青扇

麦蒔の日梅ゆ雪梅ゆ　アハ　白来

路迄ハ降り梅ゆ　ヒ宅　勇く

都ゆ面ゆ雪ゆ蕨ゆ　スルカ　青崖

降濁ゆ濁ゆ人ゆ雪ゆ、　僊臺

[illegible]や[illegible]の[illegible]や[illegible]を[illegible]サツマ乙[illegible]
[illegible]帰や[illegible]の[illegible]水[illegible]、波文
[illegible]や[illegible]の[illegible]の[illegible]ヒコ[illegible]湖
[illegible]と[illegible]を[illegible]を[illegible]イセ一呼
[illegible][illegible]を[illegible]帰[illegible]キハリ我竟
[illegible]を[illegible]を[illegible]ミカハ之毎
[illegible]日和[illegible]サツマ得之
[illegible]を[illegible]、清流

村[illegible]を[illegible]エチコ桂雨
毎帰や[illegible]の[illegible]イカ弩秋
暁の[illegible]根[illegible]テハ涼苟
[illegible]オク江之
[illegible]や日[illegible]月[illegible]ヨリ之江
[illegible]や[illegible]サカミ如し
[illegible]エチコ石竜
[illegible]や[illegible]、都谷

刈る吉ちこうこ炭をおこす、　石亭

四条色の根ちあめふる篠ゝ色　サカミ　安成

ちゝ仏や茶ゝもられぬ花菖　遠ム　且松

初雪やさゝ波乃ゝ橋柱の水　ユキコ　安雅

冬隣と思ふ雪ちゝ、　柏雨

物さゝ色振てさゝ尺や雪の蕊、　宜雨

振ゝ色八重ゝの日和や四ゝ色山　ナニハ　素屋

鶯と起て夜明ゝ雪明ゝ　アフミ　仿山

芦の葉乃雪ゝ色ゝ振ゝ色ゝ、　梅下

掃屑けて箒根ゝ梅ゝや雪ゝ　イセ　恵雨

程色と文雪ゝ色ゝや四ゝ色の陰　ヰハリ　黄山

姫ゝ色ハ色の〻覚ゝ色雪明ゝ　ミカハ　遵字

雪の色ゝ色ゝて通ゝ人ハちゝ　ユキコ　和子

雪の色ゝ色ゝふゝ色ゝ色ゝ色ゝ　ヒタチ　雪仙

仏法乃箒ゝ色ゝうゝえゝて中部の山　アハ　相亭

西瓜ゝ色根の雪を見る日ゝ郷　シナノ　古

[illegible]屋の所と同つきや現代家、主人、
二三度ハ伺ふ事して参ります　オクル　鬼雲
[illegible]を如何ともいかんせん　大費
所を程の角も用意ふ所氣ぶ　ヒセン　寸長
拡張の縄も[illegible]　ユキコ　雲路
異国[illegible]を水[illegible]　天朗
別[illegible]の学[illegible]　蟻丈
[illegible]ハ[illegible]　万分

遠くより[illegible]の屋[illegible]　キハツ　山峰
[illegible]の[illegible]　ユキコ　霊仙
[illegible]や[illegible]　ミカハ　般丈
[illegible]　ヒセン　[illegible]
[illegible]　ユキコ　風眉
辻[illegible]や[illegible]　好都
[illegible]の[illegible]　未秋
[illegible]　カヒ　[illegible]

常春の義を常も常の命　とせし　眉山

春雨やさゝ紅梅のそらんぞ　アハチ　魚楽

ちもまも紅ゆる梅を常を常　アハ　仰牛

春之部

初かゝ春見添す梅の雲の命　魯心

春雨も鶯よりはやはるの雨　杜有

上ちもぬやの菜つむ水の青　岳流

海青菜も豊よりの朝日和　万古

明ちの雪とゆる彩さんとんぶ　荷水

朝青風や梅人を酒盛の人　祖仁

青青と篠の反る青青れ　伯遠

白波の青つゝを止んで波うゝる　宗雄

青宗さや青を鶯へ加ふる雀　秋青

青の霞春よりかまる日の出ぶ　嵐雪

青屋のうら移りする魚うり　二柳
西うけや梅ちる家ぶりの郎　畑見分
初寒や去年乃ちさの立うり　宝秋
ぬるさるる日さしも流やうの花　呂川
弁ちのるよりうるふや寒庵　仙尼
咲寒や一日二日烏来白ふ　丘鴻
やるる寒乃仙寺もこん岩の梅ぶ　梅笠
岩のうるも来てみてさ約瓶　万山

小松原より春雨ふや紙子の声　炉雪
梅ぶ紙屋の松ぬ峠　峠　竹友
ぬるよ羽をひろけさまや明石　梨秀
波ゝ蝶孫ゝ湖ゝ第ゝ雪　木卯
ぬるうるうるる猪とさるる海の月　万頃
ひるる紙の松ぬ寒ぬ　表月　甚雪
手の影をさや波ゝ孫ゝ行　孫生ぶ　大之
色色ハさる松乃明尺朝さるる　梅舟

為手ゝ[illegible]物の朝ぬらす良　知白
咲ぬや[illegible]角ゝ春と花　角角
ゝ家のゝとゝ[illegible]人ゝ枝の茶　梅美め
咲ぬ[illegible]や湯ゝの湯ゝ先　幻水
ぬ咲て咲ゝも若ゝ一ゝ[illegible]打　知足
食ゝ[illegible]て世界ゝ[illegible]花ゝ[illegible]ゝ　素陽

ゝ[illegible]郭や[illegible]のゝゝも幸のゝ（テハ）　橋月
波かゝら長ふてゝゝ初日影（ゆゝり）　應志
掃除ゝゝ[illegible]ゝや初日の若ゝ（アチコ）　種雄
知角や辻行ゝ[illegible]消ゝ[illegible]、　大栗
一輪ゝ眼のゝゝ[illegible]福寿草、　相雨
[illegible]水乃[illegible]ゝ[illegible]男ゝ角（カヒ）　橋義
[illegible]葉ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]（ミチヌ）　万竜
[illegible]山ゝ[illegible]ゝ[illegible]門の睦月が（サカミ）　素砂

[illegible] 九起
[illegible] イセ 双亀
[illegible] フミミ 岳風
[illegible] オク 赤目
[illegible] 松ヶ 一浦
[illegible] テハ 秋雲
[illegible] イナハ 成山
[illegible] サツヘ 桃戯

[illegible] アヤミ 芋丈
[illegible] ヨトリ 勝居
[illegible] ニチコ 雨村
[illegible] 鬼哭
[illegible] 松嶽
[illegible] ミナヨ 湘玉
[illegible] カハシ 自来
[illegible] サト 良族

[illegible]原や[illegible]を[illegible]て[illegible]霞　上毛　木公

[illegible]を[illegible]を[illegible]を[illegible]　下毛　杜山

[illegible]や[illegible]を[illegible]を[illegible]　新甫

[illegible]月や[illegible]の[illegible]、　野分

[illegible]や[illegible]　カツケ　羽人

[illegible]や[illegible]　まゝり　荷分

[illegible]日[illegible]や[illegible]　三毛　桐雨

[illegible]の[illegible]や[illegible]　シナヌ　一之

[illegible]を[illegible]や山の雲　マルカ　漣山

[illegible]和[illegible]の[illegible]や日乃[illegible]　吉佑　香羽

[illegible]て[illegible]の[illegible]沼[illegible]や[illegible]　サカミ　山覇

[illegible]と[illegible]　アハ　楚宮

[illegible]の[illegible]や[illegible]　ハリて　可大

[illegible]乃[illegible]人[illegible]　イタミ　太乙

[illegible]の[illegible]を[illegible]掛[illegible]小[illegible]　イヨ　几胥

[illegible]代や[illegible]を[illegible]の[illegible]　イワミ　北方

まろうどの藪かくしうゑや梅の目（イロ）法石
梅が香簾洩けてゐる小多糸、桂洲
ほと梅白妙ようにみなせる利（京）盛年
る宴のかよ回も糸一梅の毛、有節
梅よ流よ海をめぐりて貸せ蛮（テハ）露之
小流よ於ふて蛍くるめの花、桃曉
約束の梅見四方浦をうり（カツサ）米算
多彩のさんや朔うり梅うさる（ヨチコ）帯雨

今咲くうと思ひうり梅ち梅（下モ）其翼
四季も春も古ひうり常の毛（サト）京楓
折ふ咲ふ春よ駝ち春世（フヒシ）可椿
撰のゆうき川を屋ちく風ち梅（ちく）天艶
春百の咲ち杉をや谷乃梅（ヨチコ）水哉
苞さけて掉さうち乎や春の花、郷雪
雪よもうを見ちや山に鶯、久竜女
木の梢よ雪の春ひうり、漂香

蒙古や赤き雲うつる鐵の數　イヨ　素亭

雲の身を吹きたせハ小春哉　フセシ　木父

こゝにすや一さ乃うゝる井戸の先　サツマ　双舟

黄鳥の鳴く音　自のひゝ　キヒ　千竹

雲乃峰乃あるゝ　オク　東里

表音　鉄法のをける　ゐか　平雄

通つきよ　ヨキコ　表の音さ　ヨキコ　態化

ゆ鳴をゝ面ける　ナハリ　酔雨

ひと雲ゝ　ハキ　大地の鉄　蒔池

清　忘れて　ホク　阿

表うをやきと　レナヌ　若人

ゝ風法利　エコ　十庫

松の下や　ヨキコ　波翠

松那と　の中ゝ　表　文魚

法　蓮　焼　陸の　南映

蓮葉の　二ん　、　菊子

山の雪とけて海をてらす月　雁（マルカ）　麗し

きりめうの孫くゝ春くゝ初の蕚（サカミ）　木鶏

春ちまゝ蕚ふ毎まゝ尽や峠　蛙（ヒキヒコ）　蓼南

霜ふて蕚よ裏はゝ　蛙可寿（サツマ）　史分

雪の下紅毛紅日よゝ　ちまゝ、　湛文

春の月　雲の下の蕚　蕚（サト）　芦風

広海や蕚をめゝ　鄙月　（ヒキヒコ）　康所

春もまあやおぼろ湖　（サツマ）　玉堂

思猫の春柳や春の海　、　巴雲

面うけて長芋の物る　橋　穂（ムサシ）　桃御

手庫ゝ　植て長ゝ　蕚ゝ曲　（ニナヌ）　白彦

春ゝ名の乙ゝ　蕚ゝ　月外

蕚蕚乃　橋　蛙　春ゝ巣の葱　（カ）、　柏実

春柳ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　（ヒキヒコ）　弘ゝ

青蕚や　春ゝ　蕚ゝ　蕚ゝ　、　宜春

夕ゝ　水ゝ　ゝ　柳　蕚、　飯月

海辺の人は見て柳う面　シナヌ　香石
和歌人者多き所なるべし　ノト　明ゝ庵
陸奥や柳を鉾に　オク　西嶽
人行や帯解くて結んなり　サヌキ　今芝
結ぶて樹を繁とする柳ぶ　イヨ　黒雅
押紙を解も枝めく春うれ　キクコ　赤鮮
春の雪や二月の山の鶯　エチコ　友芝
苗代や濁も清て有明り　雲洞

糸まへて苗代水の出るなり　可申
種蒔て石和の陣を明ぬ　カツサ　如英
菜畑やまつ笑を春慰　ヲハリ　思文
赤き魚や春の山ちり散ぬ　ナクコ　松代め
為のしさ乃果て深し春の山　木屑
和歌の浦四辺や麦まきけ　テハ　吟震
義大石男に知らる為智り　トフサ　知盛
出代と為も同し名の為ぶ　ヒムカ　巴石

出代や提をたづさへ初まと（チクセン）　千十
春の雨つゆ雲雨ふる雲　、宇遠
響峠や響の日和も白のゆれす（ヒセン）　米岳
相村　新のうれしや根きゝ（イヨ）　波風
畠村のうをはつる謙う事（エチコ）　芳泉
呼ひふをゝ結ひや畑ひうう（上毛）　一朗
出てはゝ名日のさゝや蛇の尻　、岳羊
梅柳陳あしうて出ひうし　テハ　万丈

義乃や川の明ゝを傷ゝ　、素山
雪ゝあゝ亜ゝ亜ゝの森新　、可憐
四ふ往ひまゝ住ふ沙ゝ家　、幽雅
又ゝ行ゝ治ゝの五ゝ重ゝ　（サカモ）休平
ゝやくゝと川ゝ赤ふむ沙ゝれ（ミヤハ）　蹇馬
絶うゝて長行　憐や御ふき（ミヤコ）　芳英
橋うけや為ゝ　かゝを八発行憐（サツマ）　竹里
葉の色や田年　細年ゝる車（タニハ）　湖舟

葉の色よ萩ちるまで　畑可南　カヒ　二葉苗

風さよ吾と呼庵　一うらかれ猫　、雲里

紙屋や年の為ハ　ナヽ　丹嶺

入れの風呂よ紙や　ニテハ　陸奥

面もきて寒ゆるる　十二ハ　禾咱

蔦さ柳ちるの年　俳中　恕兮

れ持ちて垂柳　松ヵ　字路

振庵ちるも年　ヒセヒ　路苏

ちるもやかた世さ桜の咲ちひ　十六　祇白

ちるの宗や一枝ちるの雪せけ　サヤヽ　梅堂

神ちるや宗陸ちるの乃杭の寄　ユチコ　公水

橋ちて宗ちるへや花乃ち、　　對橋

雪色の花ちさめく　ミナヌ　可厚

咲ちて色ちるめ色の陸　サロミ　元和

末ちくと古姫の宗ち宇俳　五爲　菜尾

嘆ひちの乃里ちん紙やもの　ヌモ　赤足

鬼ゆりくんともしく櫻の雨 サト 君海

袖冬に似たるしきや絲子の声 むつ 桐古

きし帰や山まるに蓮ふ家の形 三田 友月

躬の絲子艶の悲しきの出入 ミナヌ 梅埜

諸屋の絲絹もこ衣 錦咲けり 松阪 素泉

藤原に贈つくなりて露これり エチゴ 半羅

出来さや新の雨雁の行ふけ エチゴ 晴山

草にみる絵もめくらし風中、 計月

山吹は岩もぬ蜘の庭ふさう車 サト 香松

山吹や足洗ふてすりぬ鳥 アワミ 菴青

山ふきや駒の出入し隣合 エチゴ 尾泉

山吹や綾つけいとん花も世話 イカ 蚕化

川原の石引し諸や家と露 エチゴ 奇峰

夏之部

和尚歌や先志あめやう 橋 姫　　得蓮

朝霧の中さんとうきの高雲　　遊客

漁船乃乾く白ひやもりの高系　　蒼年

舟の雪ち伊勢きき新船系　　石分

垂際て陸を陸きの物の高雲　　波暮

高の鶴のうきたて高し相う年　　竹城

居あうや色きき木枯の時　　丁知

芋も木色き戦きして時鳥　　字六

もみぢあ枝も月枝ぬ　　言山

杜若枝垂すきの陸の利　　登吏

時伝のやうすもの見きの鄙の　　由誓

動くくと出水鶴や声きの時　　溶め

見のうと絵うもの嬉の見　　呂風

芋の秋枝よりの高星　　秋星

うも般と舞きぬ枝の吹えの　　一秀

花枝の屋のうの扇の　　金星

一たゝび射て又たゝむ櫂うの音　惟孝

ゆく春をうしの八雲一新の面　念〻

水に浮世の根赤一夕の苗　白雄

ゆく秋の禁て田植ゆ　由之

春の一夕さて明安を移す　竹山

當花井を雑や掛さ　枝ゆ

さゝほさゝ毎の春や初ゆく　蕉路

禁ゆもの行さは時の姿うを　瀟め

投さ物を鎖をちふや冬ゆ　知雪

一ちさゝ峠さ紅の野　云廣

ゆゝちさ雲を移ゝ義う角　謝堂

大原ゆさくさ見毛ぶ　雀丈

年ふ二の湖ち絶ゝ　又〻

六月や講乃門を掃さ　千代

猿人のたつゆ毛夏木之　松堂

世ふ影や動窓落ふて星を紅　宋角

集会改

下平

雪ハまだ残りて菫の花　暉遠

旅人とたゞ泊めしあるじや　得雄

炭の香ゆ初秋　ムサシ　京秀

野ハゆゝ高ひ　フンコ　鉢方

桑会の井や　ヒタチ　鉢の口　那巣

門田のうゝ深めき　三定　芋乗

雨ぬるゝや川を渡りて青屋　下毛　柳塢

絵仕ゝる鉢の乃ゆゝ　ヨチ　樂

庭をうて酒強ゝ　オウ　北麟

大連の鉢立ゝ　チクセン　和風

野ゝ山ゝ　キハリ　素行

ゝの鶏頭ゝ　ヒセン　橘坊

菊ゝ行ゝ　ヨチ　晴松

和の鉢や　テト　梅之

郭公 ほとゝぎす　時雨 しぐれ　甚 はなはだ
上下 かみしも　源 みなもと　五瓢 ヨヒサコ
又雲八 またくもはち　杜宇 天子　思鄙
時雨 しぐれ　曲阜 イタヾ
海上 かいしやう　鳴鹿 アヤメ
仲 なか　雲石 イセ
所 ところ　蓋天 おほあま
手 て　峯丸 ナカト

雨 あめ　皮石 トサ
祝日 しうにち　橋平 シナヌ
系 けい　校長 サヤヾ
年 ねん　雪瀬 ヨヒサコ
祭 まつり　子容 アヤヾ
伸 のび　孤琴 ヒセン
如 ごとく　楓下 ミヤヲキ
年 ねん　三蔵 ヨヒサコ

今川を清水の上に社家、文雪
蘇る色ひろしとや雪ひろ　スルカ　仙菜
明るかる新しかるかな　シナヌ　菜分
伸る葉をもちぬ喜川、
居ハもれと高く抽枝、猶醒
庭一面の雪の新樹　フンヲ　雪人
夕霧の晴るる新樹、　ユチコ　素行
山嶺乃情をの雪　テヅ　琴堂

牡丹見る眼ゆ小鳥も鳴うる、　古峯
雪光の旭寺角す　サカ　柏翠
花ゆ雪うけのさびたる　ユチコ　宜風
見もとへ日のさしたる雪　ユチコ　白峰
著るを雪うる孫を　イヨ　露丈
垂簾の松ゆ物を　サツマ　佳昌
伝を木や猶掛ゆ八月蒼、　集門
行竹ゆ行ゆ松ゆ　ユチコ　其扇

竹婦乃明りも暑き夕かな、　一呼

ふくき人に物云ひける粽かな　カヒ　袁翠

針ほどと思ふ程ある夏の月　スハウ　風阿

飛もせん帆影まけるや鮎の子　伯耆　布汀

通ひ路の年々悲しく出ふ扇かな　ヒゼン　禾堂

栴檀乃樹して拾ふ扇子かな　十二ハ　五韻

琢しくさらや扇子の明るさ　アハチ　梅盧

帰しくれ涼しき雲の木織かな　アキ　和切

涼しさや年頭の御涼の竹の先き　三宅　千蝶

暑ひと人の寝たる涼しや雨の音　オハリ　梅理

居なからも立て風すや御涼床　テハ　双竹

猪るて扇子乃主ある東山　キク　東曉

夕ひき雲おさまるや晴の影　ミカハ　卓池

人ちしう竹の枝にあふさ影かな　エチコ　松年

能狸に打く手鞠や涼生入、　適与

彩扇て喰物焚えんするさ事　サカミ　雨適

竹屋ヶ月ヲ見て行燈ノ下ノ清水
草ぼうぼう岩の上に咲やく桔梗あるか 五月
麦を搗き麦も五月の立ぬ前 テハ 松茸
夜の秋や只ひとつ咲ける、 夕顔
海を書き波ふしぶしの木下雪、 松自
窓の竹乃一ぢを見えて夜布立 下モ 柳家
帳ぶち書もや燈乃ひとつ柴 サカミ 樵石
川留まりて和歌浦ぶしの、 柱本屋

掃除しつゝ入梅の志ぶり森 ヲヲ 令栽
五月雨の奥乃深さや山の家 イセ 杜蘭
栗の木むくもふくさえぶり マツ 三千坊
五月雨や廣うぶ晴こぶ オク 二朝
夕涼や月乃ぶ池ぶ稲ぶ ナニハ 月尤
梅の実洗てぶ妙性 ハリマ 芋園
梅干ぶ夜ぶ明ぶ クニハ 清渓
紙板を一ぶつ如井の雫 ヒチコ 玉谷

橋爪や昔を知る人遇て　ヤセ　淀節

月清し心を欲のたゝぬ故　佳峰

牧柱や恒ふる昔の秋　烏谷

山の井乃絶ぬ流れ水　アフミ　玉緒

ちるもくるゝと雖も庭中　苦の花　ニカヲキ　海舟

薄や かゝる夕雲夕しぐれ　津川　和風

ちるや昔を偲ぶる人の袖　下毛　徐和

けしの花和ぐる日無間を分　セキヨ　山水

ちあり　雨の時と朱さ利　テハ　御水

矣いきを思ふ海月軒　ヒセン　鈴堂

樓閣の花さくや九輪の夜雨　コシヨ　伍尺

ちるももうるをも数や孔雀みち　三チヨ　吟路

ちゝ絶るあ樹の中ちる岩さくら　テハ　宇祢世

樹一田て仮説ひちる手足の郷　、　玄子

水ち音やちるを田極角　カ、　椰壺

笠ふき植めの乃ちる木のもゝ　ヨチヨ　巴流

拙弱うたゝや 阪田の仕業孫 テハ 可州
拙けるる 苗と仕はやもとゝあ サト 文仙
所者を半紙通すや子ゆゑれ カリ 都丈
青ゆもの喰さゝもちゝ昇り形 カヒ 雷石
業結を足て体 結る居形 ユチフ 番菊
つ村と初ゝ湯ゝや 蟬の居 ミセン 一著
あまけゝちゝ高ゝや 蛭の居 カヽ 卓丈
清ゆの居ふとゝ 蛭ゝ高ゝ カヒ 金吾

内と居て縄を田ゝやとふ 蛍 エキコ 左物
実ゝゝ清ゝ出の清ゝ形、 樫園
足ゝゝ高ゝ人乃ゝ清水ゝ ミナス 雀園
濁ゝゝゝ出ゝゝれ ムサシ 菜皮
欠ゝ口ゝ苦の加ゝ清ゝ形 コヒ 而后
毒を又嘲乃ゝ高ゝ ミヤサカ 七尺
拳の角ハ濁ゝ菜ゝ藤の居 チノコ 和戎
仮面ゝ海ゝ ヒムカ 双鳥

樹々を八潮の流れ舟に影を　サヤヽ　章園
立籠る霧をもとめやこの暮　カツサ　菁莪
折からの雨ぞ降り　修り　東湖
稽古すしてある蓮の白玉　ニヒ　松風
新うけて深草を移す蓮の池　イヨ　烏岬
見て過ぐるあり紅の花　、竹所
五の色かなやぬれ乃潤ひ　テハ　寛車
暮のまに物を移して　オク　太良

板橋と岸も高く書田の軒　ムサシ　千瑞
軒に見て居ながら書田の　ノト　竹雨
名さまに惜しもやいなん　アキ　露峯
組うけて変へうつるや弱工　ユヌエ　洞く
さまざまの影やこの暮　イヤ　石影
家郎と紙の障子を自移ぶ　メンコ　馬良
居蔵や後より移るよ窓　ヒセン　松宇
森をもとと一四月ある移ぶ　オク　由人

[illegible]や蕣引みし休柘子　葵巴

下葉を刈て汲清水の郭　雨蛙

秋之部

星合や月の宮の庭掃て　連志

竹ゝせハ世を[illegible]の葉　正昇

数時ハ[illegible]や書しき本棚　松什

紫竹ハ[illegible]ハ[illegible]　桃谷

[illegible]　芦窓

雲雀松[illegible]ゝ[illegible]利　大勝

鄙[illegible]や[illegible]の[illegible]蔓を[illegible]　杉居

蕭の[illegible]や[illegible]墓場　弄化

[illegible]の[illegible]　[illegible]

名月の[illegible]ハ[illegible]　小柯

仮[illegible]の暑[illegible]　湖山

野ちの一の後をうつくや秋の空　ゆき

秋の末に春ハ春とまよふ　京　梅室

門川も掃て盆なる塚　アツ　鶯洲

初秋や角ゝ紅の新　エキコ　八袁

ちり残や答を尋ぬる林　カク　舉堂

初雁やうつる新しき板の色　テト　二丘

七夕やあるよりのゆたしき　フアド　多世め

との星のあふと思ふもたのもし　エキコ　美蓮

ちる影の羅通す一葉ふる　カヽ　北山

水うけて切さい生候　桔梗の郎　サカミ　月年

朝の月乃ゝ残る桔梗　アハキ　墨雨

色よれい秀吉ゝ　大スヒ　臣二

時止て後よりそをそれ　イヨ　春儀

志賀ゝ笑ふ萩の花　五名　東垣

森の古女ものして相ひうつ　ヒセン　鈴相
紙帳の百年ふるえて雷ふる　ノト　涼臺
足もとに山を回りかまくら　イヨ　絮人
懸崖　水を流すと落ちる　下ル　雪堂
ものえの花の中にてうつる　アツミ　芦岳
稿書や破軍かくふく成吉思　カカ　丈翠
罷すの上を踏む老の軍　テハ　吳蓬
松よりも低き老の軒きう　カウハ　抒霧

秋人の夢を吹く尾花うつ　エチコ　秋篇
朝陽乃井より清き雪の郎　大ヘラ　太素
ゆらけて新る稿ふかき芝の　チノコ　山公
木の葉うつ相ひ文て書く灯の影　エチコ　抱嶺
拂ふ蟹を蛇ヶ蘆の　ナカト　白宣
市先の拂拂てかう姫の郎　アハ　花笠
踊笠堅ようけても面白し　　茶雷
射かけ物ものもて躍う軍　ヒセン　碩水

雁ゝ寄ゝ所の月ゝ見ゝ遠ゝ望の月　餘力

姫切ひく幟の頭ゝや雪仙花　ノト呂雪

角先やたゝみうけ新の雲　サワラ　甚松

青簡を繰て空松の形　既醉

扉の春ゝ向けハ月のうゝ急　チクセン　月初

嶺やまけ畑ゝ畳ゝ菜の色　ネナ　如柳

屋ゝ寄ゝ志ゝの磯と寄ゝ　三田　二笑

星乗や点ゝ消行川の色　ミヤコ　糸魚

寒ゝ年ゝかゝ日ゝ寄ゝ結ゝ結ゝ糸　アハ　木烏

点ゝや姫根ゝ千ゝ鶴ゝ上　テハ　霞山

乱ゝ星ゝ清ゝ志ゝ屋ゝ毎の秀　ヲセ　兼烟

糸のゝ雲ゝ雲ゝ寄ゝ毛ゝ井ゝ露　日向　駝岳

雲ゝ鶴ゝ見ゝ雲ゝ稲ゝ雲ゝ　オク　智鷗

陣や八日の源を春の浪　スハカ　抱布

烟や鶴ゝ雲ゝ帰ゝ雲ゝ　サカミ　雲溪

日ゝ雲ゝ雲ゝ帰ゝ雲ゝ春の井　エチコ　里英

虎ヶ崎こうもり畑や稗をしめ、眉白
細搔て俤しれや夢の世、柯亭
暁の秋月ふきまぬかりけり　アハ　赤十
川上へ乗て鮎の暁　ヱチコ　守年
分てわけの言さや三ヶの月　サカミ　の合
言自や人ふるあらぬ心　チモ　雨坐
行雲を潜るや池のかいつぶり　ヱチコ　三甫
蔭ふ木もなの一分秋自ふる　カヒ　欽我

名月や古もくぐ消ぬ新ら秋　ヱチコ　碧梧
めい自の拍子ふる老　ヒヒ　石谷
ゆ雲さわぐ稀ふ月の宮　下モ　白鯨
赤ゆ紅吸ふ自の虎ふ　、三子雄
明ふ色ハやふ明るまの宮秋自　上モ　尤谷
山をて出て一夜や秋の月　ヒセン　無く
月の影やうくしかと人の表　京　杜鵑
放ふ雲を上て立をう　ヒタチ　桃二

生和は梨子眼よりたん咽るかな　カウヤ　昇峰

鈴音や持さし行日の西空　アハキ　斉康

眼のさめて枯ち歩く冷う市　イヨ　太華

花の色はさめて角ふく咽えり　アキ　雷仁

折ふしは傷よさすや東の月　エチコ　士定

書買よさしふ為て市の船　、　梅窓

旅宿の鶏うしろ見て新しき　、　北甕

寄書一向をあるうち地のひき　、　素年

敗れ寺も帰て休む白　スルカ　勇山

蝙蝠て嘶ふ山むや寒時雨　フンコ　杜厚

高ひくとひと寒よりめ与も　ミカ　為休

朝ふ時眼のうつり行菊ふ　アキ　呈美

京ふも為ふ抜ふ行の月　ヒコ　呈月

寒ふ京の山めもめふ伝の月　エチコ　蕉泉

茂し水岡も冬ふ通ふ　、　可晁

言書ふも行て新出ふ　、　桔哉

新初て秋手もとゝ門田　チクセン　墅行
赤桔や野路の都る細赤うも　サカミ　布石
むくち地の方に細形や庚辛る　テハ　化勝
雪の姿も秋て咲る乃宗桔る赤　アキ　其古
都より紫山る背原一淡つき　ムサシ　五渡
多外を加けて芭の蘭う手　三宝　木影
葉もめ一入を黄さる蘭　テハ　稲洲
赤うもて入くく赤ぬ赤の山　エチコ　西晴

秋風や白へさき信うしら　ヒ名　嵐亀
散ら咲ふやを家一時　ヒセン　于江
物人もかへしに見や多多　ヒコ　青年
人参の方よさるう！を紅多　イカ　帝声
桐まを葉よ牡る山家う　イセ　流芳
敷の上へ張ものを多多　明五仄　立宇
四上るを元うもを多多　エチコ　木山
流し物よを葉一有枝石多　サワて　東鯨

きのふ迄くさ山畠やうらの秋の雪、素秋

夢多の夢を高ふや秋ふかき　下ヶ井江月

好ふ山ろうや都の雪　十二八　鐵兄

峰寺を報謝とうや九月尽　シナヌ　鯉角

追加

山を焼くもちうきまうき　サヌキ　茂雄

枯てのくゝ仲山ろくや山の裾　ヨハリ　月底

葩手葉芭加ふれかれ、　李蓑

身ゝ儂ふくて出家ゝ時雨ふ　イセ　一幽

道くも踏つい赤い猫の恋　ヒセン　甫田

藤こ手の手添ふきや別ふ、　子栄

赤ち世ちこ人地色のうゝ山、　竹支

行春に青丹の石階ひさし、蒼山
篠堅乃らの乾きくふ小さき庭　ナニハ　林曹
青い空七分も拭て明るく利　タレマ　太和義
戦く篠の中に都を柳る、元頼
鶏の音に如是て枯る花可南　テハ　西出里
う絶たて雨も海る地に、青逸
照降のさ[illegible]ら雲に、雪解
大きな音に如しも明る、耕朔

雪解や垣にうつる鄙の春、丘月
春鶯出てさいうつる柳の京、月山
菜餅やうつる一日宿乃春、瑞山
宿うつて猫にも侍る庭の春、菊谷
行春や雄の鶏も歌く竹、汐松
春よせて春雨つゝふ若葉哉、逸月
蔵に水一斗の垣に走くあり、買古
新を出て弁当春秋の際、爭牙

紅梅や針線や松ふる、　羽人
見ぬ世の梅ふる梅の雪、　文志
義加什乃小溪　梅の命、　双甫
橋筵を恒の稿先ゆきまつる、　芦蝶
ちつぷりと雪を敷て起て走る、　如旭
風の走る音　婦く枝明り　仙子　北幸
川音もくるる夜と柳、　涼峰
雪敲の乃ちめし初春、　立石

絢まれを明日を限りの千菜哉　松子　耕雪
陶士の雪乃都中ふるや神迹、　然允
水仙の供ふるや手習子　アフミ　芦一
給料を捷為の行巨燈哉　エキコ　有木
正月も常の雪を湯身哉　弓湖
日を少し出て低るや掌の雪、　文巣
山焼し松ふる始る青柳、　一花
町を離れし家や雨うるむ、　井森

美しく枝露しく出す秋茶花、以都
風の秀麗と山色格別なり、月山
家内なる一度も無尽猫の毒（キクラ）を解
退八幡八幡しく蔵の毒（ムサシ）天由
根係は特別見事なる茶都陝、杉暁
書物なしく書是る少紙なる素紙（そもち）
方丈地と朝おそく相の茶、桃子
水上へ七夕の夜乃踊りなり、射芳

大明しく消かる竹籠なる、芦滴
敢て行り物枝も有藤乃うき洗、宗古
留守なしこの人も著を語りなり、四条
寄なるも無も為めなる為なる時間、雷雄
太郎なる流しなるなる日乃（ヒムカ）月雄
小字やもなるなる八犬伝なる、漆乃
御の先と只めるん出て梅の花（ワカサ）子翠
冷蓮や時時もきる落くなり、宇坂

生長と稲や麦めぐる畑打　紙中要覽

雲うごかす河とかるや春の水、八足

江うら色染ちうるとゝめ陣、竹の

郷波はと見うかゝる柳うま　メシコ　かな

紡時ハ赤屋も春や春の西　オノ　埋山

数ハ八ハ冷うゝ赤のうゝ山　サヌキ　五蘆

見るたゝぬ影ひハさめを好の雲、木長

加さまもひやとゝ雲ぬ橋　カハチ　ふこ

海の浮る月や木影を砧る庭、老栗

加減しとう升あきり数ぶ　月影

行くち小屋ち江うゝの蔵うゝ　ハリマ　袁村

ひゝ竹の走利ちや雲の中、月士

ひとまゝ形漕乃ゝ芝可車　キヽ　荷了

稲つ乃やうゝ稲着ゝも涼む藤　スハウ　赤兄

ちゝ写乃おき浮ゝ物ようゝ寸　フシコ　春星

もとまの つゝみる数やさのふゝふ　ヱチコ　道旋

五月雨のあうるに枕の五位の秀（エチコ）　李晴
釣殿に傘のふさき亀ゝ雨　子相
望の面とある雲ゝ小雨ふる　多保
立鳥の後ゝうつやに白き水　況墨
花ゝ来て手ゝ人の手し像ひめ　友相
おろす牧の春の烈しや青ゝ　椿山（ミナヌ）
色を尋ね私み雪小ゝ　歳之め（サカミ）
釈の梯一枝の音ゝ望の月　不定（上毛）

柳明（サカミ）
菜碎（アツミ）
松睡（上毛）
月雪（フシコ）
井泉（ヤマト）
徐晃
三亭（エチコ）
九宝

高屋よりみと眼の身枯あが　よ雪
要ひとつ帰りてくるを玉川　竹葉
蟬なくやみ時と色を鄙時外　新
庭のもを浴てもあり梅の実　雪ち
山の尾のみ見つつ白雲　宋山
南の手よ大きしとしと牡丹の　サヌキ　蓼丈
雪の根の枝を廣うや反木立　蓬洲
枝も交り蹴の動きやその川　オリ　清民

辻番の掃部して居る鶏頭の色　イヨ　一丸
行秋の小鶏　春の枝寒ち年　ミトヨ　梅有
竹葉の色もさめる草白が　上毛　百角
温雲山の姿もつるや山の坊　、素之
玉巻て砂をさるも玉巻蕉が　傷文雄
ふさく眼を雪を初くて雨　臨星
二三本一度よつて小角立つ　、文河
枯く雪ようて入れ小林の蝿　、卯雀

蛾眉の加減しつゝ秋の湖（ムサビ） 汶平

ちゝ爲柳 ちゝ史 孩子 保子

朝夕に秋しるしあらたなる 梅芳

追悼

枯芝のむらん枝の露 羽觀

人切に一つ寄あるもこそ 史源

細立折もたゝかるたもと 牧子

潮の音や秋の空中に星紅し（ヒカリ） 英子

あやめふくまゝ赤しく松の海 卓堂

口上乃先ゝあらふや老の風（カワカ） 峰午

菅苗のまゝ入たゝや縁つゝ（ワカハ） 桃窓

仕出さ松とつゝ和尚（ムサビ） 正妙

水仙や紀ふゝ蒙の作 吉芝

無色ゝ和ゝ形ゝや茶ゝ、 冬秀

大象形清ゝ全家の上（サカミ） 紹瓜

乳ちちのうとを引出す小蝶哉（シナヌ） 樗平

打ちうち霧掃ひ掃ひ萩の玉、 素堂

情見や種ひて降る庵乃梶（ムサシ） 月火

涼しさや雅の松風神の秋（ト毛） 竹由

人形の松ちち文殿の月（ユチコ） 南史

いろいろ元の西しや秋の雲（スルカ） 嵐川

もとのくさやく横手山乃雨（ヱキセン） 陸奥

松風を奉しくく聚山ぶ（フセン） 八重丸

古稀の書を迎へて

えふふうと物もちち紙を門うち（サヤキ） 樗一

ちちやの猫酒も添て皆迎文（十二ハ） 嘯石

不二見ても思ひちちと茅場の夕（ユチコ） 素雲

壱猪の地と動く松やちち秋（ナカト） 子船

悲けて思ちやうちやの雲（ノト） 柳堤

松ちちうや新の雪も秋の雨（ユチコ） 素雲

年の秀茶と愛をひやうせ（サト） 百志

水鄙よりも晩き春の郷（サト）　岳我

遅咲きく京の遅桜　夕ゆふ（ユフヒコ）之白

稽素よ稽子の掬乃素り　（イワ）一夏

きの夏を嘆ひきんを忘を亀（トモ）　矣山

多野咲て浮世多郷とせし　春の雪、　亀也

抜き踏ハひきうと物きを姫切ゆ、　蘇仲

蕨かうゆを振ふ一茶の角、　亀友

茅の丈きとよ言しおき　扇（メセ）　狂琴

ゆきまと（サカミ）と茶もかうりう青ゆうし　素術

本石ゆ蒜のゆ面てきりう　ゆ多

風乃笠や板屋の京言　（イワ）　九年

岡やしい者のうゆ　や枇杷の実（ユキヒン）　お眼

降つく乎片ゆうせて祖　、　蓮雨

余のゆよん春　持てゆ　呉城

井　蕨く　夏　ゆ　ゆむゆの思（ヒメナ）　啄秋

豆魚やうめいて通ゆ子（大仏）　紅琴

本降よりなをさかしくてさかしくて　和歌

行きてみるやゆかりのむさしの　宗伯

一時百年のゆめ　木の芽　花実

いきもしやゑのきもとをもかれ　乙夏

文章園主人書

自然堂鳳朗小傳

自然堂鳳朗姓源氏後裔人初稱巖島京弥仕于本藩少好俳諧自号京侯及于後東都遊遍尾張問道于義仲寺蝶夢行脚暁臺之門二師皆一見器之京弥居職盡力且欲有與人異者肥後

古十四郡合加末良五家二郡為
十六郡原弥猶末良五家ニ岡山野
寛曠顧ミ人煙未満ニ地為公開
之石山可平乃中宮探ニ得逢神
巫ニ人ニ寛政戊午辞仕游歴四方
邂逅ニ柳蕃及竹友士朗諸名家於
是尋祖篁ニ精蹟於奥ニ細道彷
清人ニ舶来于崎ニ攬浦戚畫徧
諸州遂来江戸ニ居ス所樵馬場窓
迎竹林日聽蟬聲人咲曰等閑蕃
對竹時興成美道義等旦夕唱和
文政十一年ニ召福住中橋大工衛
明年春羅災又出游于上國等閑
當志悉談學而未得師友偶會鶴

海西在浪華澤書萬笠喜就
聞其説深與海西交是故也天保
初年還于江戸作園城西敏
倉更稱今號逝今俳風特爛
糟粕而深朗造詣自清新實出
于自然四方之士推以為一代宗
匠歲癸卯二條公為概主奏授明
神之號乃召朗賜神宣公時呼
朗為先下翁可謂極名譽矣
鳳朗性淳厚而有義氣不好飲
事節恰其應列參大夫之招孤篁
滿前而敢傍下箸所食不過一汁一
菜四十歲以後不敢近婦人其行
如持戒者然矣而惡其類浮屠性

潔白而復靜性自然以和化之

十一月廿八日沒享年八十有四

鶴峯戊申撰

中根元圭書